潮音寺だより

第 244 号
平成 16 年 2 月

電 話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp
〈ホームページ〉http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 -10-11

盆画：小島やよ子

どんなことが
あっても
弥陀は
必ず
わたしを
お救い下さる
その
安心が
生きる
活力となる

モノモライの話

最近の人気テレビ番組に「トリビアの泉」というのがあります。トリビアというは、この世の中で知っていてもしょうがないムダな知識のことだそうで、毎週、聴視者から寄せられるこのトリビアをパネラーが品評する番組であります。パネラーが感銘した時に押す「へぇボタン」が商品化されたり、そのとき発せられる「へぇ～」という言葉は、二〇〇三年度の流行語にもなりました。

たとえば、「小便小僧がおしっこをしているのは、爆弾の導火線の火を消すため」とか、「真珠はあさりでもできる」といった類のものであります。

そこで、それにあやかるというわけではありませんが、たまたま読んでいた『旅のなかの宗教』（真野俊和著）の中に、モノモライに関する知識が載っていて、「へぇ～」と思い、他にも二三資料をあたってみましたので、紹介させていただきます。

それは、「モノモライ（麦粒腫）という呼び名は、物貰い（乞食）という意味からついた」、というものです。

近頃は、衛生状態や栄養状態がよくなったせいか、モノモライを患っている子どもをあまり見かけませんが、私たちが子どもの頃は、よく、このモノモライになりました。ある程度年配の方はよくご存じかと思いますが、まぶたにできる一種の腫れ物で、医学用語では麦粒腫というそうです。これに罹ると、私の母は、棕櫚の箒の毛を一本引き抜いてきて、目頭のところを、コチョコチョと突いてくれました。涙の出口が詰まっているのが原因だから、こうすれば治るというのです。

たしかに、モノモライで眼医者に行った覚えがありませんので、この呪いのような治療で治ったわけですが、たいていの場合は、放っておけば四～七日で治るもののようです。

このモノモライに関する習俗は、棕櫚の毛もその一つでありましょうが、実にさまざまあるようです。それを最初に着目したのは、あの日本民俗学の創始者として有名な柳田国男であったとのことです。

私の母は、メンボといっていましたが、メコジキ（中部）・メボイト・ホイト（中国）・ノメ（東北）・

メカゴ（北関東）・メバチコ（近畿）・インノクソ（九州）など、その呼び名は、全国から拾い集めると、実に二十数種にもなるそうです。その中に、モノモライ・メコジキ・ホイト・七軒乞食など、乞食のことを意味する一群の呼称があり、それらは、治療法である呪いからきているというのです。

呪いに関しては、まぶたに小豆を当て、それを井戸に落としたり、篩や箕などを井戸の上に半分だけかざし「治ったら全部見せる」と唱えるもの、眼の前で藁を結びそれを焼く、ツゲの櫛の背を温めてまぶたをこする、着物の褄を糸で縛っておく、臍に塩を入れるなど、数えればきりがないほど、各地にさまざま伝承されているようです。

中でも、物を貰って歩くという方法が、呼び名に深い関わりを持つということで、こちらも実にさまざまあります。

七軒乞食というのは、七軒の家から麦の粉を貰ってきて、焼き物にして食うというもの（神奈川）で、他人の家に行って障子の穴から手を差し入れて握り飯を貰って食べる（長野）とか、橋を渡らずに三軒から食べ物を貰って食べるとか、本当の乞食から米を貰って食うといったものまであるそうです。

ただ、この呪いは、麦粒腫に対して行われていたというのが、もっとも一般的ではあったのだけれども、時には、熱病や胸の痛みなど、他の病気についても語られる方法であったということです。そこで、柳田国男は、この習俗について、次のような説明を加えています。

「物を貰って食べるということは、元来、卑しい行為ではなく、食べ物を通して、他人とのつながりを作る働きがある。人はこれによって、心丈夫になり、孤立の不安から解放される。」（要旨のみ）

なるほど、病気は、不安なものですから、そんな時には、引きこもるのではなく、他人の家へ物を貰いに行って、「私も罹ったが、すぐに治った」といってもらえれば、さらに、安心できるわけです。

どうも近頃、世の中が殺伐としてきて、心を病んでいる人が多いのは、このモノモライを患うことが少なくなってきたからかもしれません…ね。

菩薩　ぼさつ

「菩薩」とは上求菩提下化衆生（仏を仰いでは悟りを求め、利他のために人々を導く）につとめる大乗の修行者をさします。しかし、仏教史のうえでは菩薩という言葉は、さまざまに用いられました。釈尊の前世物語では、前世で修行にはげむ釈尊その人を菩薩と呼んでいましたし、小乗と呼ばれる部派仏教の文献にも菩薩という言葉は出てきます。

「菩薩」とはサンスクリット語のボーディサットヴァの音写で悟りを求める人や、求道者などと意訳されます。

菩薩は次のような四つの誓いを立てて修行に専念します。

「衆生無辺誓願度・煩悩無尽誓願断・法門無量誓願学・仏道無上誓願成」すなわち、生きとし生けるものを救う・すべての煩悩を断つ・仏の教えをすべて学ぶ・無上の悟りを得ることを願う、という四つの誓願です。

菩薩は大きく二種類に分けられます。文殊・勢至・日光といった智慧を象徴する菩薩、普賢・観音・月光といった慈悲を象徴する菩薩です。これらの菩薩への信仰から菩薩は単なる仏道修行者という意味ではなく、非常に高い位にまで到達している聖者をさすようになったようです。（『仏教百科』）

住職通信

合掌ほど
誰でも何時でも
何処でもできる
平凡な善行はない

雑記

▼ねんざ

昨年末に、不覚にも階段で足を滑らせ、捻挫してしまいました。三日間位は、歩くのにも不自由しましたが、息子が法務を手伝ってくれましたので、ずいぶん助かりました。やはり、そんな油断があったからかもしれません。反省、反省。

▼銀行

当山にいちばん近い銀行から、この三月で統合廃止するという案内が、突然届きました。公共料金の引落等、いちばん利用していただけに、残念であります。面倒な切り替え手続きのことを思うと、ため息が出ます。

▼水仙や背伸び

しいく花器の中　沐魚